

「東北発 2006年度 高校生国際化プロジェクト 100」

シリーズ
第2弾

高校生は 無限の可能性を秘めた「原石」

国際教育&キャリアサポート

dibec 代表取締役 多田克士



高校生はさまざまな可能性を秘めた「原石」です。全員が「ダイヤモンド」になれる可能性を持っています。高校生の進路選択は「原石」を「ダイヤモンド」に変える一つの分岐点であり、その可能性を引き出すための重要な役割を周りの大人は担っています。

今回は、弊社が支援する海外への大学留学を含めた高校生の進路選択に関して、私たち周りの大人がすべき事を検討してみたいと思います。

高校生の進路選択において、何が一番重要なのでしょう。偏差値？学校の進学率？大学のレベル？親の希望？家庭の経済状況？今後の安定性？

もちろんそれぞれの学校の方針や各家庭ごとのさまざまな事情があるかと思えますし、それを踏まえた上での進路選択が望ましいとは思いますが。しかし、ここでもう一度改めて考えて頂きたいのは、進路選択というのは、言うまでも無く生徒本人の進路選択であるという事です。一番重要な事は、まず「本人の夢・興味・関心・価値観」を本気で聞き、実現可能かどうかを一緒に模索する事、ではないでしょうか。本人が夢や目標を持

っているなら、その意志をもっと尊重すべきです。可能なのか、本気なのか、をどことん話し合う。できるかどうか、本気かどうかを本人と一緒に試行錯誤する事です。そして最終的には本人が決めるべきです。先生の主観でも、親の希望でもありません。この一連のプロセスが欠如しているケースが多いように思われます。

「何に興味があるのか」「将来の夢は」「将来就きたい職業は」「なぜその大学へ行きたいのか」「なぜそういう事を勉強したいのか」など、進路を決める上で聞かれるべき興味や価値観といった事を、生徒たちは突き詰めて考えさせられる機会がほとんどないのが現状です。16〜18歳の年代で、将来やりたい事を具体的に言える生徒は少ないと思えます。だからといって、本人の興味や夢が全く非現実的と判断するのは、短絡的過ぎます。だからこそ、聞いてあげる、考えさせる、という役割が重要なのです。「気付き」や「きっかけ」を与える役割です。生徒たちには、自分の考えを裏付けできる経験が絶対的に不足しています。これを補えるのは、経験豊富な周りの先生方や両親しかありません。

生徒がどういう事を本当にやりたいかと思っているのか。それを聞いてあげる「傾聴」と「きっかけ作り」。ここから本当の進路選択が始まるのではないのでしょうか。